

平成25年度「産業社会と人間」実践報告

「産業社会と人間」委員会 北原立朗・阪本康之・石田光枝・塗田佳枝
鈴木愛梨・久保美由紀・中井毅・金城幸廣

要旨：昨年度までの産社の活動や実践に加え、今年度新たに取り入れた授業実践の試みを中心に、その成果と課題点をアンケートと生徒の反応をもとに考察する。

キーワード：自己理解 他者理解 社会理解 進路と将来 科目群選択 コミュニケーション

1 本校の「産業社会と人間」と今年度のねらい

総合学科高校においては、自己の進路への自覚を深めさせるとともに、将来の職業生活の基礎となる知識・技術等を修得させるため原則としてすべての生徒に「産業社会と人間」（以下「産社」と略す）を履修させるよう文部科学省により決められている。

本校における「産社」は、一昨年までは本校開発科目である「産業理解」と併せて、実質上4単位で実施していた。しかし教育課程の改定にともない、平成23年度よりこれを発展的に改組し、当科目を単独として実施することとなった。「産業理解」に代わって新たに設置された「キャリアデザイン」は「産社」と共に進路学習、キャリア教育として2年次からの科目選択を見通した内容となっている。

本年度は原則として金曜日5・6限時の2単位による授業を年次教員8名で担当した。

文部科学省による「産業社会と人間」の教育目標は以下の通りとなっている。

ア 自己の生き方を探求させるという観点から、自己啓発的な体験学習や討論などを通して、職業の選択決定に必要な能力・態度、将来の職業生活に必要な態度やコミュニケーション能力を養うとともに、自己の充実や生きがいを目指し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度の育成を図ること。

イ 現実の産業社会やその中で自己の在り方生き方について認識させ、豊かな社会を築くために積極的に寄与する意欲や態度の育成を図ることとする。

今年度は上記の教育目標を踏まえ本校の特色を生かし、より発展的かつ具体的な目標として、

「自らの考えで立ち、自分はこう生きるのだという思想的・哲学的基盤を持つ人間の育成」を目指した。

今日の日本社会においては生活様式や価値観・人生観ともに極めて多様化し、情報は洪水のように溢れ、何を持って自らの進路を選択するか、という判断を行うことは極めて難しい状況である。また就業環境においては、かつてのような年功序列や終身雇用の時代は完全に終わり、それなりの大学に入り、それなりの会社に就職すれば一生安泰という考えは過去のものとなった。

このような時代背景の中で、いかに自らの生き方を考え、必要な情報を取捨選択し、自己実現に向けて行動するか。そうした能力を兼ね備えた人間の育成が急務である。

そのために今年度の授業内容には「出会う」という言葉をキーワードに、様々な体験的要素を取り入れた新たな試みを行った。また生徒の主体的活動を重視した点として、ディスカッションやインタビューをはじめとするコミュニケーションを通じた内容に力を入れた。これにより、ただ単に教員からの知識を得るのではなく、生徒の主体的な活動から様々な考えや価値観を獲得し、知的好奇心の開放と広い世界を知ることのねらいとした。

これらの試みを通して自らの生き方を考え、哲学的素地と人生観を育むきっかけを見出すことが今年度の「産社」のテーマである。

2 授業計画と新たな試み

1) 年間指導計画

今年度の年間指導計画は別表 I の通りである。

基本的に例年までの流れを踏襲し、入学直後に行う「コミュニケーションキャンプ」や、広大な農場を生かした「菜園づくり」、附属校とタイアップしている「特別支援学校との交流会」は本校恒例の看板授業となっている。また 2 年次からの科目選択を行うための進路学習として、各種ガイダンスの取り組みも例年と同様に設定した。筑波大見学では様々な授業を生徒の希望する分野ごとに参観し、また校内も生徒が自由に見学した点は新たな試みである。

全体的な流れとして、1 学期は体験的学習を中心に置くことで外側にむけての興味を持ち、社会に対する理解や自らの世界観を広げる活動を中心とした授業の展開を目指した。2 学期は 1 学期とは反対に、自らの内側に視点を向け、大学や特別支援校などの関わりから思想的・哲学的なテーマを扱い、一人一人の生き方や人生観を見つめ、進路を模索する内容を重視した。さらに 3 学期は自らの考えを他者に伝え、外側に発信するという、人とのコミュニケーションやディスカッションを中心とする活動を行った。

年間を通した一連の流れは「①外から得た知識や体験を、②自らの中で吟味し昇華させ、③その後の行動につなげる」という本来の学習過程や人間の成長過程と一致する。また 3 年次に行う「卒業研究」に至るための取材や発表のトレーニングとして、3 年間の教育課程を見据えた内容となっている。

2) プロジェクト学習の導入

今年度の新たな取り組みの一つに「プロジェクト学習」と呼ぶ単元を導入した。この試みは各学期に 1 回ずつ、3 週にわたって連続して行う講座であり、より実験的かつ広範囲な行動を伴う内容を可能にし、先に挙げた今年度のテーマである「自らの考えで立ち、自分はこう生きるのだ」という思想的・哲学的基盤を持つ人間の育成」を実現するための授業実践の場として設定した。

プロジェクト学習を進める上で、キーワードとし

て「抽象度を上げる」という言葉を用いた。これは、ものごとを考えていくうえでの視点と概念を変えることにより、同じものを見ても、見ている世界は変わるという考え方である。環境問題において例えるならば、身の回りの環境、地域の環境、国の環境、世界の環境、地球規模の環境というように、考える尺度によって、見えてくるものも変わってくる。そして行動も変わってくる。このことが「抽象度を変える」ことと生徒に説明した。

抽象度を上げることにより、これまで見えなかった世界が見えてくる。その結果、自分の生きる世界が広がり、学問に対する知的好奇心が膨らみ、自らの人生を考え進路を選択することへの関心が強まるのではないかと考えた。

そうした背景を踏まえ、そのための具体的な内容として、学期ごとに「社会理解」「自己理解」「他者理解」をテーマとする様々な活動を用意した。内容の詳細は後述する。

3) 授業の進め方とまとめ方

授業展開としては、各単元を授業内では「ミッション」と呼び、新しい単元のたびに「新ミッション」を発表し、生徒は「ミッションをクリアすることで目標達成」というようにチャレンジ感覚での授業展開を行った。この実践により生徒一人一人の中に明確な目的意識を持つことができ、活動においてもゴール（単元目標）を見据えた進行を行うことができた。

また、まとめ方に対しても、各単元のテーマの特性に合わせ、班による口頭発表や、模造紙による内容展示、個々の振り返りや意見交換といった多様な形式を試みた。このことは教員が個々の生徒の特性を知る手掛かりになるとともに、プレゼンテーション能力の育成にも大きな効果が見られた。

3 授業実践報告

授業実践報告では産社の授業の中でも、とりわけ今年度に新たに追加・工夫・変更した単元のみを紹介する。

□ コミュニケーションキャンプ(4/10~13)

I ねらいとテーマ

通称「コミキャン」と呼ばれる本校の取り組みは、1999年から始まり毎年継続して行われている。入学式の翌日から3泊4日の宿泊行事は本校の中でも特にオリジナリティーの高い取り組みとなっている。顔も名前も覚えて



ていないクラスメート同士が、4日間の共同生活を送ることにより、生徒は中学校までに培われてきた「人間性・社会性・行動力・コミュニケーション力」をいきなり試されることとなる。同時に教員からは新入生の雰囲気や個性をすぐに見つけることができ、短期間で信頼関係を築くことができる。

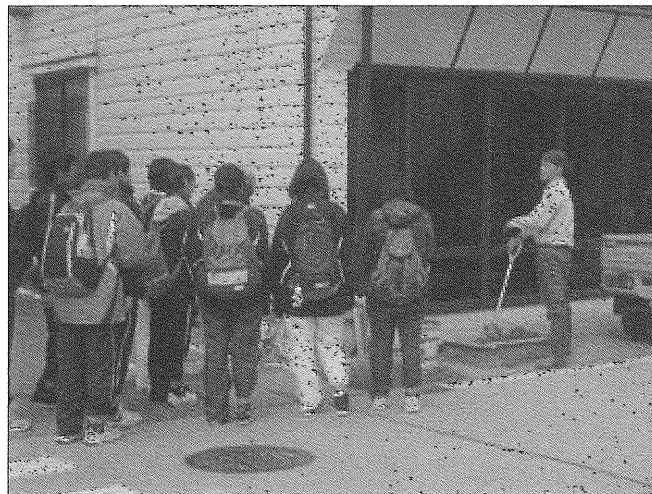
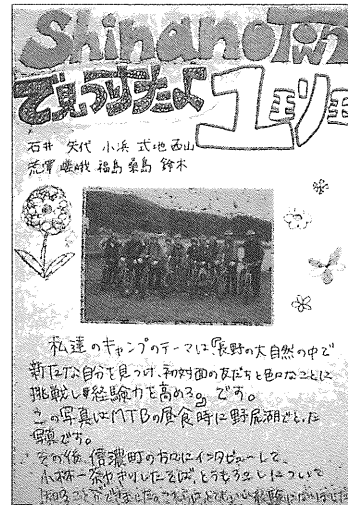
本単元の最大の狙いは、この4日間の共同生活を経て、高校という新しい環境への不安を軽減し、友人関係をつくり、本校の特色と目指すべき生徒像「自由・自律・自覚」と教育理念を理解することにある。これによりコミキャン後もスムーズに日常の授業に移行することを可能にしている。

II 具体的な内容

この4日間で生徒たちはアイスブレイクから始まり、マウンテンバイクによる野尻湖一周、残雪の中での森散策、うどん打ち、クラスレクリエーションなどの様々なアクティビティを体験する。班はクラスを越えた10人1組の男女混合班である。

今年度はこれまで毎年行ってきた活動に加え、「出会う」をキーワードに新たな試みを行った。その内

容はマウンテンバイクによる野尻湖一周の道中で、必ず街にいる「誰か」に会いインタビューを行う、というものである。インタビューの対象は班で見つけ、話を聞く最中はインストラクターも距離を置き、あくまでも生徒の自主性に任せるという、班のチームワークが試される内容であった。結果として、どの班も見事に課題を達成することができ、タクシースの運転手や農家のおばあちゃん、文具屋のご主人などバラエティーに富んだ人々にインタビューをしていた。この試みの特筆すべきところは、「地域の産業」や「人々の暮らし」といった「産社」におけるキーワードを生



地域の人々に産業や生活についてインタビューを行った

徒の自主的行動の中で学習しているということである。人は様々な「つながり」の中で生きている、ということをもつて体験するよい機会となった。3日目の夜からはまとめ活動となる。準備時間として当てられた最後の夜は、これまでの体験をゆっくり振り返ってもらうために、あえてホテルの照明を落とし、キャンドルの明かりを囲んでの語らいの時間とした。この演出はこれまでの活発な内容から一転し、自分たちは筑坂に入ったんだ、ということ深く自覚してもらうためである。同時にこれから3年間ともに学んでいく仲間との絆を感じるためである。

最終日である4日目は振り返り活動として各班からの発表会を行った。発表方法は今回の活動の中で一番班の中で思い出に残った活動や体験を1枚の写真と共に紹介する、というものであった。非常に短い時間であったがどの班も主旨を十分に理解しよい発表を行うことができた。

Ⅲ 本単元の成果

「コミキャン」の良いところは本校の学びのスタイルや学校生活の雰囲気を「体験」で知ることができるということである。同時にこのような体験型学習は総合学科である本校に非常に相性が良いと言うことが言えるかもしれない。10年以上続くこの試みが筑坂にとって、非常に大きな効果を発揮していることは言葉や数字に表せなくても、本校教員は体験的に感じている。



4日間でのそれぞれの「出会い」を班ごとに発表

□ 菜園づくり(4月～7月)

Ⅰ ねらいとテーマ

本校の広大な農地を生かして作物を栽培し、農業理解や命の営みを知る本単元も、毎年恒例の活動である。例年、比較的管理しやすく、収穫を楽しめるトウモロコシやエダマメを栽培している。

体験的学習として農業体験は非常に魅力的な教育活動であるが、同時に天候などの不確定要素や、日々の水やり、草取りなど管理に手間がかかり、難しい活動でもある。そうした条件の中で、「育てる喜び」「収穫する喜び」「食べる喜び」を通して、「生命」に向き合うことが本単元の目標である。



コミキャン班を利用した共同活動による畑づくり

Ⅱ 具体的な内容

昨年までの課題点として、主に以下の点が挙げられた。

- ①授業枠内だけでは時間的に管理できず、自主的な活動が必要となる。
- ②生徒の意識差によって日々の管理にバラつきがあり、収穫物の出来・不出来が著しい。
- ③長期間にわたる活動のため、目的意識と興味を持続させるのが難しい。

これらの課題を踏まえ今年度は以下の工夫を改良点として加えた。

(Ⅰ) コミキャン活動班のメンバーで班ごとに作物を管理する。

菜園管理は朝夕の水やりをはじめ、追肥や雑草取り、脇芽取りなど毎日多くの管理が必要となる。4

月当初は皆一生懸命に行うが、部活動や授業の課題などが多くなってくると、菜園管理も必然的に足が遠のいていく傾向にある。中にはほったらかしになり雑草だらけになってしまうケースもある。

このような事態を回避するため、すでにコミキャンで培った班のチームワークを生かし、共同で管理するという体制を敷いた。この試みは大きな効果が見られ、各班とも曜日ごとや朝夕ごとに割り振りを決め、ほぼすべての班が収穫まで管理を行うことができた。むろん課題点としては班の中でも意識差はあり、一生懸命に作業する生徒もいれば、それほど積極的でなく班員に任せてしまう生徒もいた。しかしそれも含めて班による活動としての反省になり、大きな効果が挙げられたと言える。

(Ⅱ) 班ごとに選んだ野菜を育てることにより、班活動に個性を持たせる。

班ごとの活動に個性を持たせるために、全員が栽培するトウモロコシとエダマメに追加して、班独自の野菜も栽培した。それぞれの班に希望を聞き、レタス・キャベツ・トマト・トウガラシ・ピーマン・春ダイコンなど、バラエティーに富んだ作物を栽培した。この試みにより活動に責任感とやる気を持たせ、また班同士がお互いの活動を観察することで、様々な作物の育成を知ることが出来た。

また、あわせて夏に向けて小玉スイカも栽培した。収穫の際にはスイカ割りをして盛り上げよう、という遊び心である。スイカの栽培は比較的難しく食べられるレベルのものが育つか不安であったが、生徒の日々の管理の甲斐があり、多くのスイカが十分に甘く予想以上の成果となった。

(Ⅲ) 収穫祭を催し、収穫した野菜を使って料理を作るといふ目的を持たせる。

菜園づくりは4月から7月まで長期に渡る単元である。

最初は興味を持って活動していても、後半になるとどうしても慣れてきてしまい、活動に対する興味が薄くなる。そうならないよう最後まで緊張感を持って活動させるため、収穫の時期に収穫祭を企画し、

保護者も呼んで、収穫した作物でお祭りを行うという計画を作った。当日は茹でトウモロコシとエダマメに加え、各班の収穫野菜を乗せた夏野菜うどんを保護者と共に作った。デザートにはスイカも添えた。

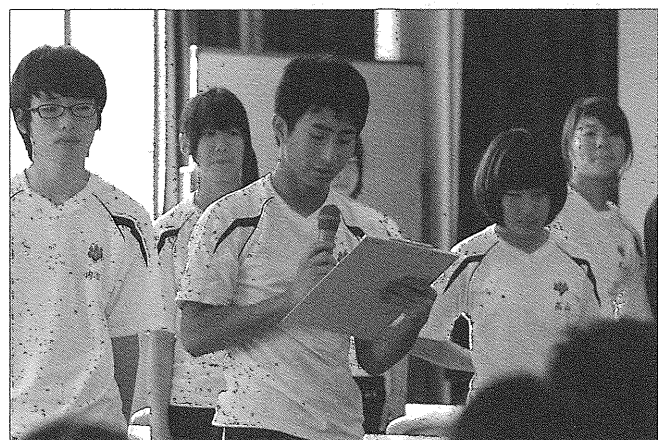


収穫祭は今までの苦勞が報われる瞬間。食を皆で楽しんだ

Ⅲ 本単元の成果

上記の工夫点は結果的に成功であったと考えている。収穫祭の催しはこれまで生徒が一生懸命に育ててきた活動と思いが結実した瞬間となった。同時に農業の楽しさや厳しさ、「食」や「命」について考える非常に効果的な時間となった。当日は保護者も参加し、一緒に収穫を行うことで筑坂の授業活動を理解してもらういい機会となった。

収穫祭の最後にはこの単元のまとめとして、各班から3か月間の活動反省と栽培活動の発表を行った。どの班にもそれぞれの思い入れがあり、苦勞したエピソードや日々野菜が成長する喜びなどを紹介した。1学期の産社のまとめとして、良い形で活動が終えることができた。



まとめは各班からの活動報告と成果発表

□ プロジェクト学習 1st 『街に出て取材を敢行せよ』(5/10・5/24・5/31)

I ねらいとテーマ

今年度の新しい取り組みであるプロジェクト学習は学期ごとに1回ずつ、年間で計3回の授業を試みた。1学期の取り組みは「社会理解」と「地域とのつながり」を主テーマとした地域取材活動である。これは近隣地域（電車やバスなどの利用も可）の商業施設や公共施設、個人商店などを取材して、様々な職業や労働についてインタビューするというものである。この活動を通して現場で働いている人々の声に耳を傾け、社会に対する認識を深めようということが本単元の目標である。

II 具体的な内容

活動は引き続きコミキャンの活動班で行った。菜園づくりと共に1学期はこの班活動を最大限に生かした。この単元のポイントとして、取材先の選択とアポ取りはすべて生徒に任せる、という指導をおこなった。とくに取材先の条件は定めず、「産社の授業テーマに沿い、高校生としてふさわしい場ならOK」という非常に自由度の高いものとした。そのため各班の中で十分に打ち合わせを図り、班長を中心に取材先を考え、アポ取りを行った。これらの活動は、多くの班は昼休みや放課後などを利用していったようであるが、中には10件近くもアポを断られた班もあった。こういった経験も取材を申し込むうえ



西入間警察署への取材。アポ取りは全て生徒が行う。

での貴重な体験になったのではないかと考えている。取材先は動物園、和菓子屋、自動車教習所、警察署など、多岐にわたる分野となり各班の個性が出る結果となった。取材活動のまとめは模造紙によるポスターセッションと、写真紹介を兼ねたプレゼンテーションで行った。発表時間は5分ほどであった



ペットショップにて仕事の苦労話を聞く

が、どの班も分かりやすく、また普段見られない商店の裏側や、苦労話など充実した内容の取材発表となった。

III 本単元の成果

教員側としてはもっと高校生が行きたそうな場所（たとえば遊園地や繁華街など）を予想していたが、意外と生徒は保守的であり近隣の商店を選択する班が目立った。交通費は生徒持ちであったため、金銭的な事情も考えられるが、もう少し広い範囲での活動を期待していただけに、小さくまとまってしまったのは残念でもある。しかし、今後卒業研究をはじめとする取材活動をする場合、今回の体験が生かされることは間違いないと言える。この活動は、そのまま夏季休業中に行われる職場体験学習にリンクし、身の回りの産業を知るうえで、非常に有効な内容にすることが出来た。



まとめ発表会は取材内容を各班から報告した

□ プロジェクト学習 2nd 『街で 100 人に聞きました。人はなぜ生きるのですか？』
(10/25・11/1・11/8)

I ねらいとテーマ

本校は2年次以降の時間割選択を1年次の2学期末に行う。そのため2学期は時間割選択をはじめとする進路関係の題材をメインに置く内容となる。例年まではこの時期に各科目群の授業見学を行っているが、今年度はあえてこれらを外して、自らの人生や生き方に向き合うための哲学的な内容を扱う授業を行った。テーマは「自己理解」である。

II 具体的な内容

「人はなぜ生きるのか」。この哲学的な問を各自が考え、班でディスカッションし、今現在の「自分なりの回答」を模索しようというのがこの単元の目標である。まず事前の準備活動として、自分たちの身の回りにいる人々に取材活動を行った。「人はなぜ生きるのですか？」といった質問をぶつけ、考えるための「素材」を集めるという試みである。取材活動は「自分の家族・親戚・知り合いの人への取材」と「学校周辺の通行人や商店の人、住民など街の人々への取材」の2種類を用意した。

特に「街の人々への取材」では4人一組の少人数班をつくり、約一時間ほどの取材活動を行った。ビジネスマンから散歩中の親子、ラーメン屋の店長など実に多くの人々を取材することができ、中には10人以上に取材した班もあった。戻ってきた班から順次、取材内容を模造紙に張り付けていき廊下に張り出すという作業を行った。これにより次週の授業までに各班が聞いてきた様々な意見を生徒全員が知ることができた。事前の素材としては十分なものとなった。

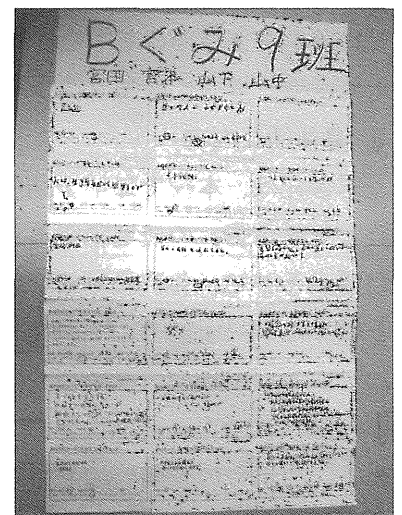
3回目の授業はディスカッションとまとめ活動として、前回の取材内容を参考に班毎にディスカッションを行った。テーマが難しく重い内容のため、話らいの雰囲気あまり固くならないよう場所や形式は特に求めず、校内の好きな場所に散らばって、自由に話るといった工夫を入れた。一時間ほどのディ

スカッションを終え、各HRごとにそれぞれの班からの発表を行った。

III 本単元の成果

事前学習を行う前の最初に考えは、多くの生徒が「自分の幸せのため」や「楽しいから」「自分の夢のため」といった自分を主体とする単純な内容が多かった。しかしまとめで発表された内容は「人のために生きる」や「人の数だけ答えがある」「正解などなく、一生懸命に生きることが大切」など、非常に深い内容のものとなっており、課題に対し様々な思索の足跡が十分にうかがえた。感想も

「はじめ聞いたときは難しそうと思ったが、やってみたらとても興味深く多くのことを語り合えた」「自分が今後どのように生きていくか考えるよいきっかけとなった」といったものが多数あった。このことから、自らの人生観や進路を見つめるよい機会となったと言える。この単元が直接、時間割選択や進路学習に生かされるかは未知数である。しかし授業を終えた後の生徒たちの感想は非常に多くの思索のあとが見られた。この実践が今後どのように生かされていくかに注目したい。



ディスカッションは各々好きな場所で自由に話を進めた

プロジェクト学習 3rd 『アゴラの討論 in 筑坂 ～自分のモノサシの外側と出会う～』

(12/5・12/13・12/14)

I ねらいとテーマ

プロジェクト学習 3 回目のテーマは「他者理解＝自分の知識の外側を知る」である。

これまでの活動を通して、社会・産業など外側の世界と、哲学的・思想的な自分の内側について考え学習してきた。その経験を生かし、自らの考えを外に発信するとともに、他者の意見や考えを受け入れ、個々の世界観や価値観を広げようという試みが本単元の目的である。

II 具体的な内容

本単元は、本校で毎年 2 回開設している「教員免許状更新講習」の授業講座とリンクさせた。具体的な活動として、免許状更新講習に来る外部の先生方と様々なテーマについて討論してもらおうというものである。本単元のタイトルになっている「アゴラの討論」とは古代ギリシアで盛んに行われたといわれる、広場での公開討論のことである。本校を「アゴラ（広場）」に見立て、各所で様々なテーマで自由討論を行った。

今回の重要なポイントとして、「知らない人、関わりの薄い人と語る」ということを念頭に置いた。そのため班構成も、クラスを越えたランダムメンバーで行った。お互いよく知らない関係であるために様々な気遣いや寛容な気持ちが必要となる。またテーマ設定も班ごとに話し合っただけのため、テーマ決めの時点から本活動は開始されている。テーマ決めの条件は特にないが、注文として「抽象度」の高いものを考えるように生徒に要求した。これは高い次元での会話を求めるためである。出てきたテーマとして「愛とは」「お金とは」「幸せとは」といった深くも難しいテーマが多数用意された。

授業当日は 30 人弱の更新講習参加者と多数の保護者が来場することとなった。講習参加者には事前に本授業のねらいを説明し、積極的に討論に参加するよう声掛けをしておいた。



答のないテーマに対してあえて向き合うことをねらいとした

また、出た意見を自由に書き留められるよう模造紙や付箋紙を用意して、討論が見ている側にも分かりやすくなるよう工夫を凝らした。

III 本単元の成果

本単元で目指したものは「知らない人の対話を通して自らの世界観や考え方の尺度を広げる」ということにある。したがって討論の内容やテーマがどうであったかの評価は二の次であると考えた。

わずか 50 分弱の討論ではあったが多くの班が有意義な内容の討論が行われていた様子が伺えた。また後半から盛り上がってきた班も多く、時間がもっとほしかったという意見も聞かれた。最終的なまとめは各自の感想レポートという形で提出させた。免許状更新講習参加者にも感想を提出してもらったが、実際に討論に参加した内容と共に、非常に有意義な活動でありコミュニケーション能力を養うための効果的な学習であるとの意見が多数寄せられた。



免許更新講習の先生と有意義な会話を弾ませた

4 今年度の成果・課題・考察

「産業社会と人間」は本校において、大きく二つの目的があると言える。一つはこれまで記してきた授業実践にあるように、「社会理解」「自己理解」「他者理解」といった非常に大きな尺度から世界や生き方を考える哲学的側面ある。もう一つは2年次から受講する授業選択であり、4つの科目群や自由選択科目の中から自らの興味と将来を踏まえ、後悔のない選択をさせるための下準備としての側面である。この二つの目的は生徒自らの進路や将来を考えるという点では共通しているが、実際に授業として展開したときに、これらをバランスよく内包することは限られた授業数から考えても非常に難しい。しかし本稿の冒頭に記したとおり、生徒たちが生きるこれか

らの時代は社会構造や生活様式、価値観や人生観が極めて複雑化し、刻々と変化する状況である。そうした背景を踏まえ「産社」におけるキャリア教育を考えたとき、まずは高い視点、広い視野を持つことが重要なポイントであり、そうした「抽象度」の高い思考を持つことが今後の生き方、そして後悔のない科目選択をする上での最重要課題と考えた。そのため今年度の授業、とりわけ新たに導入した「プロジェクト学習」では非常に抽象的なテーマを取り入れ、物事を深く広く考察する授業を展開した。

さて、上記の観点から今年度の成果を考えるために、まずは生徒の感想とアンケートの集計から見ていきたい。

生徒からの感想の抜粋

◇人の考えや意見があって初めて自分の考えが出るんだなと思った。産社でしか学べないことがたくさんあった。自分の夢についてしっかり計画を立てられた。本当に産社で成長ができた。

◇体験や活動が多く、難しいテーマを考えてみたりと不思議な授業だった。しかし本当に大切なことをたくさん学べた。いつ、どの時役立つかわからないけど絶対に役立つときは来ると思う。

◇産社で多くの人と出会い、考え方と出会い、新しい視点、自分と出会うことができた。産社は自分を変えてくれた授業でとても意義があった。

◇将来の夢は決まっていたつもりなのに、いざ産社で考えてみると「どうしてなりたいたいんだろう」とか「本当に自分からやりたいと思っているのだろうか」などを考えてしまい結局最後までわからなかった。

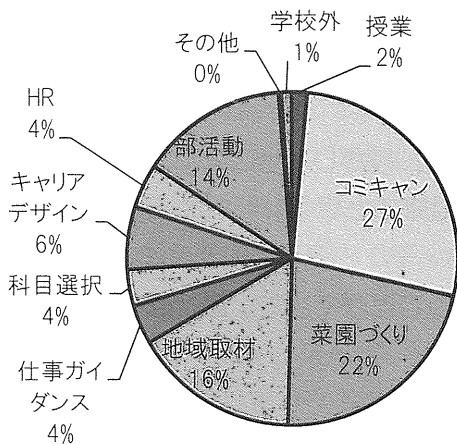
◇1年間の産社の授業を通して、自分のモノを見る目が変わったと思う。またコミュニケーション能力、プレゼン能力、さらには自分のやりたいことを見つけられ、自分を見つめなおせた授業だった。

◇産社の授業は、思いを相手に伝え、他人の思考のぶつかり合いと共有を通し、自分について振り返って、自分という存在を再認識する。そんな授業だった。そのおかげで頭と心が成長したような気がする。将来や夢に視点を合わせてそのためには何をすべきか、どのようになればいいかを考えていきたいと思った。

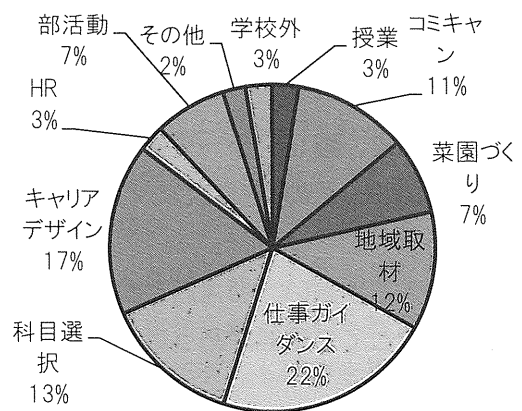
◇産社を通して成長できたことが二つあった。一つは将来についてしっかり考えられるようになり、進路と将来の夢を決めることができた。今まではフワフワとしか考えていなかったが、将来のためや進路についての授業がたくさんあり、具体的に決めることができた。二つ目は自分についてよく知ることができた。インタビューで「生きる」について質問した体験から、自分の生きがいについても考えることができた。

アンケート内容と集計結果（特に今年度の新たな試みの授業部分を抜粋）

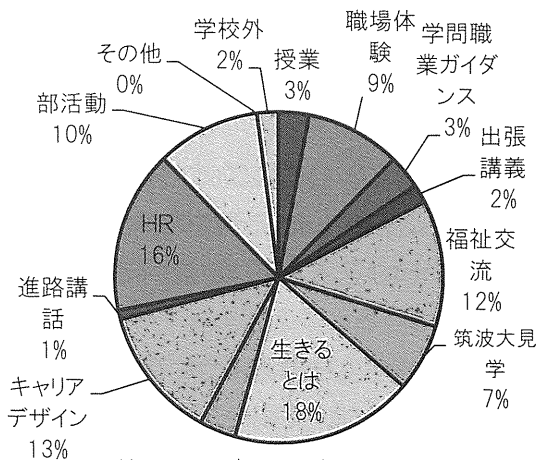
| | | |
|----|---------------------------------------|-----------|
| 1 | 人に言われてでなく、自分で考え、判断することができた。 | 主体性(思考) |
| 2 | 自分で決めたことを行動に移すことができた。 | 主体性(行動) |
| 3 | 一度決めたら最後までやり遂げようと努力した。 | 主体性(態度) |
| 4 | 他の人と協力し、助け合って活動することができた。 | 協働 |
| 5 | 他の人の意見や考えを理解し、尊重することができた。 | 協働(コミュ) |
| 6 | 自分の意見や考えを他の人に伝えることができた。 | 協働(コミュ) |
| 7 | 身の回りや社会・世界に興味や疑問を持つことができた。 | 多様性・知的好奇心 |
| 8 | 興味があることについて、本を読んだり自分で調べたりできた。 | 多様性・知的好奇心 |
| 9 | 興味があることについて、いろいろな人に話を聞いたり校外に出かけたりできた。 | 多様性・知的好奇心 |
| 10 | 様々な角度から物事を考え、自分なりに課題(問題点)を見つけることができた。 | 多様性・知的好奇心 |
| 11 | 必要な情報を探し集め、自分なりに分析することができた。 | 論理性 |
| 12 | 伝えたいことをわかりやすく(論理的に)文章にまとめることができた。 | 論理性 |
| 13 | 伝えたいことをわかりやすく(論理的に)発表することができた。 | 論理性 |
| 14 | 家庭学習や課題への取組など、ものごとを計画的に進めることができた。 | 自己形成 |
| 15 | 将来の夢や方向性を考えることができた。 | 自己形成 |



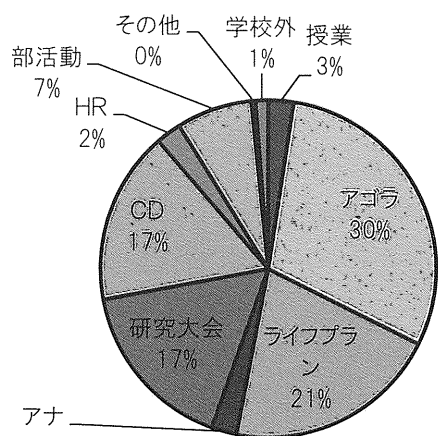
4.他の人と協力し、助け合って活動することができた



7.身の回りや社会・世界に興味や疑問を持つことができた



5.他の人の意見や考えを理解し、尊重することができた



6.自分の意見や考えを他の人に伝えることができた

生徒の感想を見る限り、多くの生徒が今年度の産社の活動は有意義なものであったという意見であった。とりわけ他者とのコミュニケーションを通して今まで自分の考えになかったことに気づかされ、そこから自らの将来や進路について考えるきっかけになったことが伺える。

感想の中では人と話し合うことに苦手意識を持つ生徒が多く、最初はディスカッションやインタビュー活動に対して少なからず不安だった様子である。しかし産社の活動を通して自らの考えや意見を人に伝えることに自信をつけるとともに、人と話すことで自分の考えも変化し、新たな発見となることが非常に楽しいという経験をしたようである。

また、これらの一連の学習効果が如実に表れたのが、自分の将来を見据え計画するライフプランの作成である。今まで漠然と描いていた自分の将来像に改めて向き合い、考え直すことで今後の進路を選択する上で大きな効果が挙げられた。と同時に産社で行った活動が将来を考える上で非常に参考になったということをライフプランに書いている生徒が多数おり、これは一つの成果であるといえるのではないだろうか。

次にアンケートによる結果から考察する。アンケートは学期の終わりごとに実施し、計三回行った。内容は15項目の質問をし、効果的であった単元を生徒に挙げてもらうという方法をとった。

先に載せた円グラフは、今年度新たに試みた単元で効果の高かったと読み取れるもの、もしくは課題となる項目を挙げた。

【4.他の人と協力し、助け合って活動することができた(1学期)】においては、「菜園づくり」と「地域取材」が大きなウェイトを占めていることに着目したい。この二つの単元はどちらもコミキャン班で活動しており、コミキャンから続くチームワークが結果として表れたと類推する。とくに菜園づくりは例年の課題があることから、今年度は一定の成果が出せたと考えている。

【7.身の回りや社会・世界に興味や疑問を持つことができた】においては「地域取材」が期待したほど

効果を上げず、「仕事発見ガイダンス」が大きな影響があることがわかった。「ガイダンス」における生徒への効果の実際は、判断の難しいところであるが、生徒側の視点からは有意義なものであるといえるのではないだろうか。「地域取材」は、アポをとり自分で探して取材に行く、という活動においては今後の卒研につながるトレーニングになったのではないかと考えている。

【5.他の人の意見や考えを理解し尊重することができた(2学期)】に関してはプロジェクト学習2の「100人に聞きました。人はなぜ生きるのですか?」が大きな成果が見られた。街に出てのインタビュー活動により、老若男女多くの人々に出会い、多くの考えに触れられた結果と思われる。年齢の違い、立場の違いにより、人の考えはこうもたくさんあるものかということ、身を持って感じた様子が伺える。

【6.自分の意見や考えを他の人に伝えることができた(3学期)】では「アゴラの討論」が非常に大きな成果を上げている。その実践が後の活動である「ライフプラン」、そしてライブでの討論会を試みた「研究大会」につながり、効果的な内容であったことがうかがえる。コミュニケーション能力を育むと共に、自己理解・他者理解について意義ある活動にすることができたと言える。

「産社」の扱う領域は単純に数値や言葉で表すことのできない思考や知見、そして知的好奇心を伸ばすことにある。そのため今回の考察も根拠を問われると、本稿に載せた資料だけでは甚だ心もとない。

しかし今年度の新たな試みは間違いなく実験的かつ冒険的な内容であり、生徒が生き生きと活動している様子から教員が感じたものは非常に意義深いものであったという強い手ごたえを感じている。

この実践が進路・キャリア教育としてどのような意味があったのかを判断するには、もう少し時間を要するだろう。いや卒業後、もしくは数十年後に意味を見出すかもしれない。しかしそうした内容こそ産社の目指すべき方向であり、今後の「総合的な学習の時間」そして「卒業研究」を見据え、本年度の産社による活動を次年度に生かしていきたいと思う。

【資料】 年間指導計画

(別表I) 平成25年度 産業社会と人間 年間指導計画

| | 月 | 日 | 主題 | 単元 | 各時限の内容 | | |
|-------|-------|-----------------|-------------------------|-----------------------|-------------------|-------------------|-------------|
| | | | | | 5時限 | 6時限 | |
| 一学期 | 4 | 10-13 | 自然体験を通して出会いを考える | コミキャン | コミュニケーションキャンプ | | |
| | 4 | 19 | 生物育成通じて命を考える | オリエンテーション | 産社全体オリエン | 菜園オリエン | |
| | 4 | 26 | 生物育成通じて命を考える | 菜園作り | 菜園づくり(定植等) | プロジェクト導入 | |
| | 5 | 10 | 社会の中での出会いを考える | 社会理解 | プロジェクト1st①(社会を知る) | | |
| | 5 | 11 | 生物育成通じて命を考える | 菜園作り | 菜園づくり | | |
| | 5 | 24 | 社会の中での出会いを考える | 社会理解 | プロジェクト1st②(社会を知る) | | |
| | 5 | 30 | 生物育成通じて命を考える | 菜園作り | 菜園づくり(追肥と管理) | | |
| | 5 | 31 | 社会の中での出会いを考える | 社会理解 | プロジェクト1st③(社会を知る) | | |
| | 6 | 7 | 職業を知る、働くことを考える | 職業理解 | 仕事発見ガイダンス | | |
| | 6 | 14 | カリキュラムを知る | 科目選択 | 科目群ガイダンス① | | |
| | 6 | 21 | カリキュラムを知る | 科目選択 | 科目群ガイダンス② | | |
| | 6 | 28 | カリキュラムを知る/職業を知る、働くこと考える | 科目選択 | 科目選択予備調査入力 | 職場体験準備 | |
| | 7 | 12 | 学習内容を振り返る | まとめ | 一学期まとめ・収穫祭準備 | | |
| | 7 | 13 | 生物育成通じて命を考える | 祭 | 菜園収穫祭 | | |
| | 7 | 16 | 職業を知る、働くことを考える | 職業理解 | 社会人講話 | 菜園片付け | |
| 二学期 | 夏期休業中 | | 職業を知る、働くことを考える | 職業理解 | 職場体験 | | |
| | 夏期休業中 | | 職業を知る、働くことを考える | 職業理解 | 職場体験振り返り | | |
| | 9 | 6 | 学問と進路を考える | 科目選択 | 学問と職業ガイダンス | | |
| | 9 | 13 | 学問と進路を考える | 進路学習 | 大学の先生による出張講義 | | |
| | 9 | 19 | 他者を知り、自己を理解する | 人間理解 | 福祉講話 | | |
| | 9 | 27 | 学問と進路を考える | 進路学習 | 筑波大見学事前ガイダンス | | |
| | 10 | 4 | 他者を知り、自己を理解する | 人間理解 | 特別支援学校交流会準備 | | |
| | 10 | 11 | 人間を知る、世界を知る | 校外学習 | 校外学習説明会 | | |
| | 10 | 18 | 学問と進路を考える | 進路学習 | 筑波大見学 | | |
| | 10 | 25 | 学問と進路を考える・自己との出会いを考える | 進路学習・自己理解 | 筑波大見学まとめ | プロジェクト2nd① | |
| | 11 | 1 | 自己との出会いを考える | 自己理解 | プロジェクト2nd②(自分を知る) | | |
| | 11 | 8 | 自己との出会いを考える | 自己理解 | プロジェクト3rd③(自分を知る) | | |
| | 11 | 22 | 学問と進路を考える | 科目選択 | 時間割作成&相談会 | 2学期振り返り | |
| | 三学期 | 12 | 6 | カリキュラムを知る/他者との出会いを考える | 科目選択・他者理解 | 授業時間割入力 | ライフプランガイダンス |
| | | 12 | 13 | 他者との出会いを考える | 他者理解 | プロジェクト3rd②(他者を知る) | |
| 12 | | 14 | 他者との出会いを考える | 他者理解 | プロジェクト3rd③(他者を知る) | | |
| 冬期休業中 | | 生き方を考え、発表の方法を知る | まとめと発表 | ライフプラン宿題 | | | |
| 1 | | 10 | 生き方を考え、発表の方法を知る | まとめと発表 | ライフプランHR発表① | | |
| 1 | | 24 | 生き方を考え、発表の方法を知る | まとめと発表 | ライフプランHR発表② | | |
| 1 | | 31 | 生き方を考え、発表の方法を知る | まとめと発表 | ライフプラン年次発表 | | |
| 2 | | 7 | 人間を知る、世界を知る | 講演 | 文化放送アナウンサー講演会 | | |
| 2 | | 14 | 学習内容をまとめる | まとめと発表 | 研究大会発表会準備 | | |
| 2 | | 19 | 学習内容をまとめる | まとめと発表 | 研究大会発表会前日準備 | | |
| 2 | | 20 | 研究発表について考える | まとめと発表 | 研究大会 | | |
| 2 | | 28 | 1年間の授業内容を振り返る | まとめと発表/祭 | 産社総括 | 産社振り返り | |